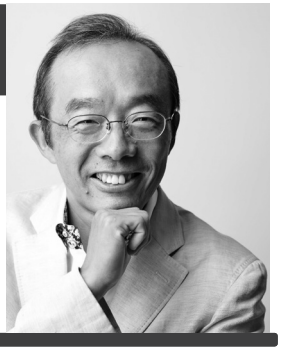
藤原和博の
教育談議
——公立校でもここまでできる

第1回　スーパー・スマート・スクールとは何か？

生徒のスマホを禁止せず授業で積極的に活用



2015年８月、文部科学省記者クラブで、奈良市立一条高校は「スーパー・スマート・スクール（SSS）」化する計画を発表し、16年４月から、教育改革実践家である私が校長となってこれを推進することになった。

SSSは生徒の持つスマートフォン（スマホ）をWi-Fiに接続して、教室での授業に積極的に利用する学校を目指すという意味だ。同時に教員全員がタブレット端末を持ち、学校事務をペーパーレス化するチャレンジも始まった。

たいていの高校では、生徒は鞄の中にスマホを持ってきてはいるが、校則で電源を切らせていることが多い。そうでなければ授業中にコール音がなったり、LINEで友人とチャットしたりする可能性があるからだ。スマホによって風紀が乱れることを恐れ、学内では使用禁止にすることが多い。

図1　スーパー・スマート・スクール（SSS）とは

①スマホを徹底活用した個別最適化学習「アダプティブ・ラーニング」に挑戦する
②大学入試改革に対応するアクティブ・ラーニング実践で「思考力・判断力・表現力」を飛躍的に向上させ、民主主義社会における社会参加を動機づける
③偏差値依存の進路指導から脱却し、社会人としての将来を見据えた科学的進路指導を可能にする基盤づくりをする

【なぜスマホを徹底利用するのか】

①最も身近なビデオ端末である
②民主主義を身近に学ぶことができるツールである
③メディアリテラシーを学べる格好の機会である
④いつでも、どこでも、個別最適化学習「アダプティブ・ラーニング」を可能にする
⑤いつでも、どこでも、自らのデータにアクセスすることが可能となる

（奈良市立一条高校の資料から抜粋）

ふじはら・かずひろ　1955年東京生まれ。78年東大経卒、リクルート入社。東京営業統括部長などを経て96年同社フェロー。2003年東京都内初の義務教育民間校長として杉並区立和田中学校校長就任。08年大阪府知事特別顧問。16年から現職。

スマホがつながらない！

一条高校のスマホ利用は、これに真っ向から反する試みだ。生徒が自分の手足、あるいは脳の一部として日常的に使用しているスマホを、学校の学習に役立てようとしている。２分間に200字の文章を打つことも可能な若い世代の能力を、リスクがあるからといって封じてしまうのではなく、むしろ積極利用することで意見を述べる力を伸ばしていこうとするものだ。

ただし、生徒と教師の信頼関係ができていない学校では難しい。

生徒全員にノートパソコンを配ったり、タブレットを買わせて持ち込ませている学校はあるが、生徒が所有するスマホを学校で積極利用するBYOD（Bring Your Own Device）方式は、おそらく世界初ではないかと思う。

教育界では、私立校の一部が採用しているように、入学時に特定機種のタブレット購入を義務付けて、それを学校に学習機として持ち込ませる方式をBYODと称する向きもあるが、これは厳密に言うとBYODではない。なぜなら、単一機種を学校が強制的に買わせて一斉使用しているだけで、生徒個人が選んだ所有物（端末）ではないからだ。

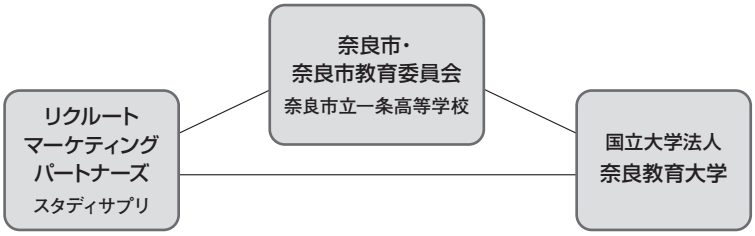
ここに、落とし穴がある。

「スマホをWi-Fi接続する」と言った場合、学校にWi-Fi設備を設け、それぞれのスマホを持ち込ませれば、楽々つながるのだろうと誰もが考えるはずだ。もちろん、私自身もそう思っていた。ところが、そうはならなかった。

禁複製・無断転載

Wi-Fi設備を学校に設置する場合、通常、自治体は手慣れた設置事業者とハードメーカーをコンペなどで選んで発注を行う。ここでは、そうした関係者を総称してパートナーと呼ぶことにする。今回の場合、奈良市教育委員会（市教委）がパートナーとしたのは、内田洋行と富士通だった。また、私が校長として指揮する２年間は、リクルート・マーケティング・パートナーズ（オンライン学習教材「スタディサプリ」の導入指導や課外授業のサポートなどを行う）の協力も得られたから、万全の体制で臨んだはずだった。

図2 スーパー・スマート・スクール（SSS）を実現するための産学官の連携体制



①「スタディサプリ」などの学習サービスを活用した学力向上支援
②視聴状況を反映したアプリの改善による最適化されたコンテンツの提供
③「適職・適学診断」「リクナビ進学」などを活用した進路指導支援
④「到達度テスト」結果を個別に分析し、最適な学習ガイドを提供
⑤未来に向けて需要が増す人材の育成のために創設する「一条観光倶楽部（IKC）」と「一条プログラミング倶楽部（IPC）」のサポート

①生徒の学習状況のモニタリングと改善指導に関するスーパーバイズ
②アクティブ・ラーニングを活用した効果的な指導法の研究開発
③スマホを活用した指導と評価の一体化に向けた研究開発
④アクティブ・ラーニングにおける学生スクールサポート
⑤連携事業の効果検証と理論的裏付け、教育現場への発信・啓発

（奈良市立一条高校の資料から）

ところが、生徒が持参したスマホがなかなかつながらなず、生徒や教員が「いつでもつながる」と確信が持てるまでに９カ月かかってしまった。

なぜか？

様々なOSで約1000人が一斉使用

一言でいえば、内田洋行も富士通もリクルートも市教委も私も、いや日本中の誰もが、1000人を超える生徒が自分のスマホをWi-Fi接続して学校で利用した経験がなかったからである。iPhone系、Android系のOSが入り混じり、1000人が1000通りのネットワーク「設定」をしている。この設定というのがミソなのである。

多分、読者も、ご自身のスマホがどんなネットワーク設定になっているか、買った時のままで、あまり細かくチェックしていない人が多いのではないだろうか。同様に生徒たちも、設定の中身には関心がなかったのである。当初、何度かのセキュリティ段階を経るとそこで回線が切れてしまうケースが多発したのは、この設定の仕業だった。

その後、100人以上が一斉にユーチューブなどの動画を見ると止まってしまうことも判明。さらに、生徒からの意見を聴取するのにC-learning（注）というソフトを使っているのだが、この能力にも限界があって、一気に全生徒からアンケートが取れないことも分かった。結局、年末までにWi-Fiポートを増設し、C-learning側のサーバーの能力も上げてもらった。さらに決定的だったのは、校長の責任で学内での Wi-Fi接続のセキュリティレベルを下げたこと。それまで慎重を期して３回認証を取っていたのを１回に減らして、一発で接続できるようにスピードを優先した。

現在では生徒がWi-Fi接続するとポータル画面が立ち上がり、すぐにC-learning、Google検索、スタディサプリ、スタディサプリENGLISHが利用できるようになっている。画面はリクルートがデザインした。もちろんWi-Fi接続中は、LINEは使用できず、有害サイトも閲覧できない。

だからSSSと謳（うた）ってはいても、まだその「スー」の字が始まった段階だ。文字通りのSSSを名乗るには2020年代を待つことになるだろう。じっくり取り組めばいいと思っている。この可能性については次回リポートする。

（奈良市立一条高校校長）

（注）C-learning：スマホから意見や質問を打ち込むと、たちどころに教員のタブレット（スマホでもPCでも可）にリスト化されるシステム。スクリーンに表示すれば、各自の意見や質問が共有できるから、教室全体で議論を深めることができる。

第１月曜日発行号に掲載します。

禁複製・無断転載